

道徳の教員研修とそれとかわる大学機関の 在り方についての一考察

—上越教育大学上廣道徳教育アカデミー「派遣事業」の成果を中心に—

丸山大貴*・早川裕隆**・櫻井雅明*・菅原友和*・
國元清光*・小宮健***・岩城淑樹***・林泰成****
(令和6年9月30日受付；令和6年10月23日受理)

要 旨

本稿の目的は、上越教育大学に寄付研究部門として設けられた上廣道徳教育アカデミーにおける「研修会への無償による講師派遣事業」（以降「派遣事業」）について、2020年度から2023年度までの4年間の派遣先の推移や研修内容の変化とその効果を検証することを通して、道徳科と道徳教育についての校内研修の在り方や、教員と共に研修にかかわる大学機関の一つの在り方について明らかにすることである。そのために、特に派遣回数と研修内容の推移、参加者の研修後のアンケート結果の分析、記述式アンケートについてのユーザーローカルAIテキストマイニングによる分析（<https://textmining.userlocal.jp/>）を行い、その効果を検証した。

結論として整理すると以下の3点にまとめられる。

- ① 学校現場の実態に応じた多様な研修内容を開発・提供できたこと
- ② 道徳科の特質を踏まえ、示範授業、模擬授業などの具体的な授業を通して得たイメージの意義や意味を、その後の講話で意味づけ、理解し、さらに、演習を通してその理解を実践的に確かめる体験的な学びの組み合わせにより、教員の道徳科の質的改善の意識を高めることにつながったこと
- ③ 道徳科の特質を捉え、伝達に重きを置く研修から、子どもと教師と講師が共に「学び合う研修」へと転換がなされていることが明らかになったこと

KEY WORDS

上廣道徳教育アカデミー Uehiro Academy for Moral Education 道徳教育 Moral Lesson 研修会 Workshop
派遣事業 Dispatch project

1 テーマ設定の意図

「令和3年度 道徳教育実施状況調査 報告書」⁽¹⁾（文部科学省）（以下、報告書）によると、文部科学省は、「特別の教科」化が目指した道徳教育の量的確保の面で確実に定着している。その一方で、学校からは、道徳科の授業を実施する上で、指導力の向上や、教材の吟味や授業構想のための時間の確保が、また、教育委員会からは、教師の指導力の向上が、課題としてあげられた。このことについて同報告書は、「道徳教育に対する教師や学校の意識の高まり」から、「さらなる授業改善のために、指導力向上に向けた取組が模索」されているためと考察している。いずれにしても、学校、教育委員会ともに、一層の授業改善が、道徳科のさらなる充実に向けた最も大きな課題と認識していることから、国の取組として、道徳教育の要としての道徳科の授業改善、指導力の維持・向上、そのための研修機会等の充実が喫緊の課題と述べている。そして「従来行われてきた各種研修等の継続・充実を図ることに加え、オンラインでの研修動画、指導のための参考資料や教材、優れた授業実践の共有など、国・地方の連携の下、『特別の教科』化以降の実践的知見の蓄積を生かしてその見える化・共有化を進めることが効果的であると考えられる」⁽²⁾としている。そのような道徳教育の研修の充実に向けて取り組んできたのが上越教育大学上廣道徳教育アカデミー（以降「上廣アカデミー」）である。

上廣アカデミーは、2018年4月に公益財団法人上廣倫理財団からの寄附による上越教育大学初の寄附研究部門として設置された。「道徳の時間」が「特別の教科 道徳」（以降「道徳科」）となったことに伴い、学校現場の教員が多様な指導法を実践できることを目指して研修と研究を推進することを目的に活動している。主な活動の1つに、無償

*上廣道徳教育アカデミー **学校教育学系、上廣道徳教育アカデミー所長 ***元上廣道徳教育アカデミー
****学長、上廣道徳教育アカデミー統括監督者

による講師派遣事業（以降「派遣事業」）がある。小中学校，教育委員会，教育センター等からの依頼を受け，無償で講師を派遣する事業である。2018年度から2023年度末までに，派遣回数延べ423回，研修会参加者は延べ10073人へのぼる。これまで，上廣アカデミーのように，事業として大学機関が直接，学校現場に入り教員と共に道徳科の研修を推進していく制度は類がないと思われ，事業としての独自性があると言える。上廣アカデミーの実践についての先行研究として「上越教育大学上廣道徳教育アカデミーの意義について—講師派遣依頼の研修テーマの変遷と，提供した内容を中心に—」（2020）^③がある。ここでは2018年度と2019年度の派遣件数の推移並びに研修テーマの変遷と提供した内容をアンケートの結果や授業の様子を基に分析し，上廣アカデミーの意義について主に2つ明らかにしている。

【表1 上廣アカデミーの意義について】

- | |
|-----------------------------------------------------------|
| ① 「特別の教科 道徳」の完全実施に合わせて，学校現場からの要望に応え，評価や授業方法等の研修会を実施できたこと。 |
| ② 授業方法等の研修内容として，さまざまな形の模擬授業や示範授業を提供できたこと。 |

この研究によると，研修内容の要望は，2018年度は，「道徳科の評価について」が多かったが，次第に授業の質的改善へと内容が移ってきた。そこで，模擬授業や示範授業を通して，講師が教師と子どもと直接かかわりながら道徳科の授業の具体を示してきた。このことは，「令和3年度 道徳教育実施状況調査」（文部科学省）が示した「授業参観の機会の増加，優れた授業実践の共有」といった授業改善に向けた研修の充実という課題を，上廣アカデミーが学校現場の教員の声から先んじて捉え，その声に応えながら，学校現場の教員と共に先進的に進めてきた成果といえる。特に，模擬授業，示範授業を通して授業を体験する機会を設定してきたこと，多様な指導方法ができるように指導方法のポイントを理論と実践を交えながら示してきたところに特徴がある。また，多様な指導方法の中でも，「学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編」（文部科学省）において，道徳的行為に関する体験的な学習等を取り入れる工夫としての「役割演技」を模擬授業や示範授業で示しながら，役割演技を活用した授業づくりの具体を示せることも上廣アカデミーの特色である。参加者のアンケートからは，「道徳の模擬授業を通して，子どもの立場に立って模擬的に体験することで，子ども理解につながった」「役割演技は，難しいと感じているが，『実践あるのみ』『やってみよう』という気になった。『できるかな？』とも思うが，今日の，授業が終わって心が軽くなったあの感覚を生徒にも感じてもらいたい」と授業を受けたりまた参観したりする中で，子どもの立場に立った授業構想の在り方を体験的に理解していたことが分かる。

その一方で，「道徳科の授業は，自己の生き方，人間としての生き方について教えることになるため，知識伝達を中心とした授業とは異なる面がある」^④「楽しい面白い道徳授業の普及には，理念・指導方法の取得だけでなく，授業者の在り方生き方も関わってくる」^⑤ため，「示範授業・講話の研修が，後も活かしていけるよう，要請校側には，つなぎ役となる授業者の位置付けや子ども達との関係性の大切さを伝える，継続したフォローが必要である」と研修の在り方について示している。このことは，「在り方・生き方」についての考えを深める道徳科の特質を示していると言えるが，授業者の位置づけや子どもとの関係性について十分に明らかにされていない。これは，「『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について（答申）」^⑥の②.「理論と実践の往還」の手法による授業観・学習観の転換と重なる視点である。

以上の視点を中心に，上廣アカデミーでの研修の成果を明らかにし，さらにその内容を検討していくことで，道徳科の授業づくりについての研修の在り方，教員と共に連携協働する大学機関の在り方について明らかにすることができると考える。そこで，本研究では，2020年度から2023年度の4年間の「派遣授業」を中心に，授業者の位置づけや子どもとの関係性の視点を取り入れながら，研修の内容の変遷とそこに至るまでの経緯を明らかにし，道徳科の授業づくりの研修の在り方とそれにかかわる大学機関の在り方について考察する。

2 検証方法

次の方法で検証を行う。

- (1) 派遣回数の推移 (2) 研修内容の推移 (3) 事後アンケートの数値と記述式アンケートの分析
アンケートは選択式と記述式の2つである。アンケートの質問項目は，次の通りである。

【表2 アンケート質問項目】

- | | |
|-----------------------------------------------------|---------------------------------|
| Q1. 研修内容は，分かりやすかったですか。（選択式） | Q2. 本研修は，教師力の向上に役立つものでしたか。（選択式） |
| Q3. 本日の研修内容で良かったものは何ですか。（記述式） | |
| Q4. 本日の研修内容を，今後の道徳教育または道徳科授業の充実にどのように役立てたいですか。（記述式） | |

記述された内容については、ユーザーローカルAIテキストマイニングによる分析 (<https://textmining.userlocal.jp/>) を行う。

3 結果と考察

3.1 派遣回数の推移

2020年度から2023年度までの4年間の派遣回数(表3)、校種別派遣先(表4)を示す。

【表3 派遣回数】

	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
県内延べ派遣回数	47	51	41	35
県外延べ派遣回数	15	9	17	3
延べ参加者数	1382	1145	1237	727
1回ごとの参加人数平均	22.29032	19.08333	21.32759	19.13158

【表4 校種別派遣先】

	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
小学校	21	15	14	15
中学校	16	13	12	9
特別支援学校	1	2	2	0
小中一貫校・高等学校	0	0	0	1
教育委員会	6	10	10	8
その他	6	5	8	11
合計	50	45	46	44

(回)

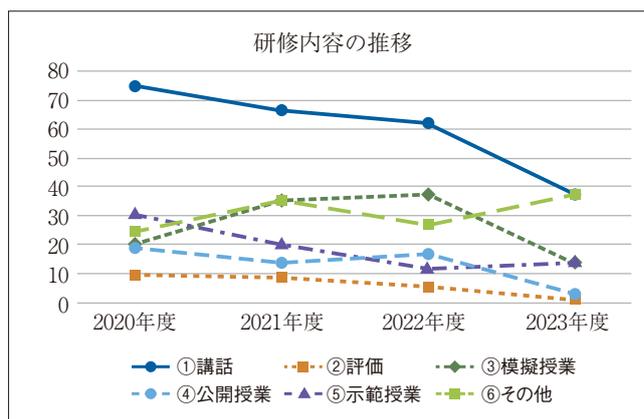
表3を見ると、2021年度以降県内の延べ派遣回数が減少していることが分かる。また、表4を見ると、小中学校の派遣件数も減少傾向が見られる。新型コロナウイルス感染症拡大により、校内での研修を実施することが難しかったことが理由として考えられる。県内の多くの学校や団体は、対面での研修を強く望んでおり、内容として要望が多い示範授業や模擬授業が、オンラインでは実施できないためであると考えられる。また、2023年度は、人事交流による特任准教授の制度をスタートしたが、初年度前半は、特任准教授の研修の充実を図るために、派遣事業についての広報活動を年度後半から行ったためと考えられる。一方、小中学校の派遣先を見ると、複数年に渡って研修を継続したり、研修を担当した教員の異動先から再び研修の依頼を受けたりすることが多い。このことは、上廣アカデミーの提供している研修内容を継続的に受講するよさを参加者が実感している1つの現れであると考えられる。

3.2 研修内容の推移

上廣アカデミーでは、主に6つの研修内容を提供してきた。それが、①講話、②評価、③模擬授業、④公開授業、⑤示範授業、⑥その他である。2020年度から2024年度に実施した研修内容について、表5、図1、表6に示す。

【表5 研修内容】

	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
① 講話	75 (42%)	67 (37%)	62 (38%)	38 (35%)
② 評価	10 (6%)	9 (5%)	6 (4%)	1 (1%)
③ 模擬授業	20 (11%)	36 (20%)	38 (23%)	14 (13%)
④ 公開授業	19 (10%)	14 (8%)	17 (11%)	3 (3%)
⑤ 示範授業	31 (17%)	20 (11%)	12 (7%)	14 (13%)
⑥ その他	25 (14%)	35 (19%)	27 (17%)	37 (35%)



【図1 研修内容の推移】

表5と図1によると、②評価が年々大きく減少していることが分かる。②評価については、2018年の上廣アカデミーの設立まで遡ると2019年の57回をピークに減少し、2023年では1回となった。また、表5、図1によると、派遣先の教員による公開授業の参観並びに指導についても減少している。2019年度は32件だったが、2023年度では、3件となり、道徳科の授業を教員が互いに見合う機会が減少していることが推測される。このことは、校内研修の内容が、ICT機器の活用・充実に移ったり、校内研修の授業公開の教科を国語科や算数科などの学力向上に向けられたりしたことが要因として考えられる。また、新型コロナウイルス等感染症の拡大防止により、授業公開による校内研修が実施しづらくなったこと、それに伴いオンラインでの研修が行われるなど、研修の在り方そのものも問い直

されていったことも理由として考えられる。だが、④公開授業は減少しつつも、2023年度も③示範授業、⑤模擬授業の依頼は続いている。派遣件数が減少した2023年でも示範授業、模擬授業の依頼は続き、全体の26%を占めている。このことは、報告書で「一層の授業改善」が、学校からも教育委員会からも課題としてあげられたことと合致する。

【表6 研修内容の組み合わせ方と実施件数】

2020年度		2021年度		2022年度		2023年度	
①③	10	①⑤	7	①③	17	①③	6
①⑤	8	①③⑥	5	①④⑥	6	①⑤⑥⑥	4
①⑤⑥	5	④⑥	5	①③⑤	6	①③⑥	4
④⑥	5	①①③	4	①③⑥	4	①	3
①①⑤	4	①③	4	④⑥⑥	3	①⑥	3
①④⑥	4	①③⑤⑥	3	①⑤	3	①⑤⑥	3
①④⑥⑥	2	①②③	3	⑥⑥	2	①⑥⑥	2
①③⑤	2	①④⑥	2	①①④⑥	1	⑥⑥⑥	2
①②③	2	①①③⑥	2	①①③⑤⑥	1	④⑤	1
④⑤⑤	1	①①①②③	2	①①③④⑤	1	①①⑤⑥⑥	1
①①③	1	④⑥⑥	2	①②	1	①③⑤⑥⑥	1
①①②⑤	1	①①③⑤	2	③⑥	1	①①④⑥	1
①①④⑤⑥	1	①③⑤	2	①②③	1	①③⑤	1
①①④④	1	⑥⑥	1	①③④⑥	1	①⑤	1
①①①①②③④⑥	1	①⑥⑥	1	①②③⑥	1	④⑥	1
①④	1	①⑤⑥	1	①①③④⑥	1	⑤⑥⑥	1
①①①②	1	⑥⑥⑥	1	①①①②③	1	①①	1
①①②⑤⑤⑤⑤	1	①②③⑥	1	①①③⑥	1	①①③⑤⑥	1
⑤	1	①①①	1	①①①①②③	1	①①②③	1
①⑤⑤	1	①①②③	1	④⑥	1		
①①①①②③	1	①①③③	1	①③④	1		
①⑥	1	①⑥	1	①③④④④	1		
①①①②③	1	①③⑤⑤	1	①②⑤	1		
①①④⑤	1	①②③④⑥	1	①	1		
①③⑥	1	①①⑤	1				
⑤⑥	1	⑤⑥	1				
⑥	1	①①①③④⑥	1				
①	1	①②③④⑤⑥	1				
①③④⑥	1	①③④	1				
		①③④⑥	1				
総計	62	総計	60	総計	58	総計	38

(件)

2023年度に増加しているのは⑥その他である。授業の事前の打ち合わせや、事前の授業参観、また子どもと派遣講師のアイスブレイクを行っている。学校の実態、子どもの実態に応じた授業づくりが道徳科では特に大切であると考えからである。授業を参観したり事前に訪問して授業参観をした後で教員と共に、道徳科の授業を進める上での悩みを共有したり、特別支援教育の視点から配慮が必要な子どもについて情報を共有したりしている。コロナ禍以降、派遣回数が増加したこと、より子どもの実態にあった授業を行いたい、教員の課題意識を捉えた上で、研修内容を提供したいという上廣アカデミーの意向が、研修の個性化につながったと言えよう。

さらに表6からは、①講話のみの研修が減り、①講話と③模擬授業、①講話と⑤示範授業を組み合わせた研修内容が増えていることが分かる。教員が道徳科の授業を参観する機会が少ないことに起因して、経験年数に限らず、実際の授業を通して授業の質的改善について考えていきたいという教員の意識の高まりがある。こうした声に応

えるため、これまで発問や役割演技の指名の仕方などの指導技術を実際の授業を基に具体的に学びたいという現場の要望に応じて、提供してきた。その方法として、講師による示範授業や学校現場の教師を子ども役に見立てた模擬授業を研修内容として提供しているが、結果的に示範授業、模擬授業の他、講話や演習を組み合わせた体験的な内容の研修が増加している点が特徴としてあげられる。また、その組み合わせ方が多様になっていることも特筆に値し、2021年度には30の組み合わせが生まれ、2023年度は、38件の派遣回数に対して19の組み合わせを提供した。限られた時間の中で、より充実した内容にするべく、現場の教員と上廣アカデミー職員との協議の中から生まれた、理論と実践を往還した道徳科の研修の在り方であるといえる。子ども役になって授業を体験したり授業を参観したりしながら、教師の手立てや教師と子どものかかわりから感じられたことを基に、講話や演習を通して具体的に確かめられる組み合わせとすることで、理論と実践を往還した道徳科の授業の質的改善研修プログラムの開発を進めることにつながったと言える。

3. 3 研修の実際

2023年度に新潟県内のA中学校で行った研修の実践事例について示す。研修の組み合わせは、①講話、⑤示範授業、⑥その他(演習)、⑥その他(事前の打ち合わせ)である。事前に、生徒の実態やこれまでの道徳科の授業の進め方、そして担任の思いを聞いた。担任の教諭は、教職歴2年目で経験が少なく、授業中の発問づくりに悩みがあること、生徒の思考に沿った問い返しに難しさがあるという思いがあることを課題として共有した。また、研修担当の教員が、研修参加者に取った事前アンケートを踏まえて担当教員と相談し、研修テーマを「道徳科の授業づくりのポイント～発問や問い返しについて～」とし、「示範授業」とその後の協議会で解説のための「講話」を行い、その学びを「演習」で確かめる構成とした。また、当日は、示範授業の前にアイスブレイクの時間をとった。自己紹介、そして日常にある具体的な葛藤場面からどのように感じたり考えたりしたかを生徒と講師が対話する時間を設けた。生徒と講師の関係性をつくるとともに、生徒の実態を把握するよう努めた。

3. 3. 1 ⑤示範授業の実際の様子

【表7 示範授業の実際<抜粋>】(T：授業者＝上廣アカデミー講師 C：生徒)

教材名：教材名「注文を間違える料理店」(東京書籍「新しい道徳2」)	
ねらい：「間違えることを受け入れ一緒に楽しむ気持ち」をもつことの意味について考えることを通して、相手の個性や立場を尊重するとともに、その個性や立場によっていろいろなもの見方や考え方がることを理解し、寛容の心をもって謙虚に他に学び、自らを高めていこうとする心情を育てる。	
導入 注文をまちがえることについて話す [発問] レストランや料理店で注文と違う品物がきたらどんな気持ちになりますか？	
C1：苦手なものじゃなかったら、まあいいかな。 頼んだ値段より高いやつならいいかな。 C2：気を使ってしまうな。せっかく作ってもらったのにいうのは気まずいし。 C3：お店が混んでいたら特に言えないかも。 C4：僕は、絶対これ違いますって言います。店員も勉強してその仕事しているはずだから、人に迷惑をかけるし、よくないって思います。	T1：自分が注文したものじゃなくても、C1さんは、値段によっては、いいなって思えるんだね。 T2：そうなんだね。それって本当は、嫌だけど、我慢しているの？ T3：そうなんだね。C4さんは、どうかな？ T4：なるほど。働いているからには、間違えずにちゃんと正しい料理を届けなければ、それはプロとしてだめだってことかな。
展開 教材文「注文をまちがえる料理店」○P94.L1～P96.L9を範読する。 [発問] 泰子さんにとって、間違えるということは、とてもつらいことだと聞いた小国さんはどんなことを考えていたと思いますか？	
C5：わざと間違える設計はしないでおうって。嫌な気持ちが残ってしまうかなって。 C6：泰子さんも、その、認知症になりたくなかったし。三川さんにとっては認知症になりたくてなっているわけじゃないし。	T5：嫌な気持ちかあ。それって、どういうことかな？ T6：自分がなりたくてなっているわけじゃない。それなのに、わざと間違えるようにするのは、違うんじゃないかって思っているんだね。
○ 働いている場面ややりとりの実際の様子を動画で視聴する。その後、P96.L10～P98.L15を範読する。 [発問] おいしい料理を前に笑っているお客さんとテツさんの様子を見て、小国さんは、どんなことを考えているでしょう？	
C7：そんなに間違えて、注意とかしないでいい。 見守ってあげればいいんだって考えているかな。 C8：うーん。私は、店員さんもお客さんも穏やかだなんて思っていて。だから、注意したら、その場の雰囲気や壊れることが怖いんじゃないかな。 C9：いやあ、うん、どうだろう？ 思い浮かばないなあ。 C10：認知症とか障害を持った人が、お店を経営とかしているとして、それを知ってお店に入った人は、その人が、辛い思いがあるっていうのを知っているから、優しく、指摘せず、接していたのかなって。障害があることをお客さんはみんな理解して、その一人一人の過去を理解して、自分なりの対応、お客さんなりの対応をしていたんじゃないかなということも思いました。 C11：うーん…。自分だったら、その人が認知症って分かっていなくて、もし間違えちゃったら、「えっ？」って思っちゃうと思う。 C12：人には、一人一人その人の常識があるから。 えっと認知症の人は、認知症ってことがどういうことか分かるけれど、障害がない人は、その人の事情を知ることができないから、優しくできないのかなって。 C13：当たり前ができるっていう風に考えているから、価値観が一人一人違うし。自分の中の思い込みみたいなものがあるってことかな。	T7：そうなんだね。でも、どうしてお客さんは、誰も注意しないんだろうね。 T8：そっかあ。自分が注意することで、せっかくの雰囲気が壊れちゃうって思ったのかもしれないね。 T9：そっかあ。じゃあ、動画を見て、どんなこと感じたかな？ T10：なるほどね。なんだかすごいこと、言っているね。 ということは、認知症って分かっているからできるってこと？ 認知症って分かっていなくても、注意せずにあたたかく見守ることってできると思いますか？ T11：そうなんだね。どうして人って、「えっ？」って思っちゃうんだろうね？ T12：なるほど。常識かあ。もうちょっと教えて。 T13：なるほど。自分の当たり前が人の当たり前とは違うってことかな。
[発問] 間違えを受け入れ、一緒に楽しむとはどういう意味だと思いますか？	
C14：間違いは多様性だと言いたいなって思って。例えば、障害がある人は働きに出られなかったり、安全な生活を送れなかったりするかもしれない。一般社会というのは、自分を中心に回っているから、気付けないこともたくさんある。だから一緒に活動して、色んな発想をもつことが大事なんじゃないかって思います。 C15：障害があるからとかじゃなくて…。同じ人間だから平等な暮らしをするってことかな。同じような生活をするってこと。 C16：間違いは障害者でなくてもあるから、だれでも気持ちはわかるんじゃないかなって。だから、障害があってもなくても同じように接すること。そういう生活を作っているのが大事なんだと思いました。	T14：間違いは多様性、すごいことを考えていますね。 C15さんはどう思いますか？ T15：なるほど。同じような生活をするってどういうこと？ もう少し教えてくれる？ T16：間違えてしまったときの気持ちは、自分にもわかる。だから、障害があるとかがなくて、みんな同じように接することが大事だってことか。そして、そんな生活をつくっていくところまで考えたんだね。 [発問] 「間違いを一緒に楽しむ」ことができるようになるためには、どんなことが大切なのでしょう。今日の勉強から分かったことにも触れながら、あなたが考えたことを書いてください。

3. 3. 2 講話と演習について

示範授業後に、以下のような内容で講話と演習を行った。

【表8 研修テーマと研修内容について】

研修テーマ「授業づくりのポイント～発問や問い返しについて」	
1 示範授業の振り返り	2 講話 「授業づくりのポイント～発問や問い返しについて～」
3 演習「銀色のシャープペンシル」を用いた授業づくり	4 質疑応答

まず初めに、示範授業の構想の手順や授業展開の際のポイントを示した。特に、主題、ねらい、発問を連関させながら学習指導要領解説「道徳編」を拠り所にする、教材文を起承転結に分けて発問を考えていくこと、ねらいに迫る中心発問となっているかどうかを吟味していくことを説明した。また、授業中の問い返しについて、事前に準備をしながら生徒の反応に沿って行ったことを話し、実際の講師と生徒のやりとりからその具体について示した。その後、講師と参加者で授業づくり演習を行った。近くの参加者でグループとなり、考えた発問を実際に行い、どういった答えが返ってくるかを確かめながら、どんなことに気付かせたいかを考える機会を設けた。教師の思いだけで授業を構成するのではなく、教材の特性、今かかわっている生徒の実態、そして学習指導要領解説に基づく学習内容の理解を基に、授業展開を協議する参加者の姿が見られた。

3. 3. 3 研修後の記述アンケートについて

今回記した研修後、参加した教師を対象に行ったアンケートの記述の一部を抜粋して示す。

【表9 研修内容のよかったものについて】

Q3. 本日の研修内容で良かったものは何ですか？
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の組み立て方の演習があり、わかりやすく説明してもらった。 ・授業構想を考える手順が明確で分かりやすかった。 ・自分とは異なる道徳授業の組み立て方の手順がわかったこと。 ・発問と問い返しがテーマであったが、示範授業や研修会で必要な視点を得ることができました。
<ul style="list-style-type: none"> ・主題、ねらい、発問の作成の仕方が具体的で分かりやすかったから。 ・ねらいの設定や、中心発問の設定、場面の切り方など

【表10 研修内容をどのように役立てたいかについて】

Q4. 本日の研修内容を、今後の道徳教育または道徳科授業の充実にどのように役立てたいですか。
<ul style="list-style-type: none"> ・育てたい力を教師が明確に意識して、それに向かった発問などを工夫していく。 ・学習指導要領を参考にしながらねらいや発問がブレないようにしていきたい。 ・問い返して授業を展開していきたい。また、ねらいにそった発問かどうか、しっかりと考えたい。 ・主題を自分で考えるなんてことをしたことがなかったので、目から鱗でした。指導要領の使い方も分かったので活用しようと思います。 ・授業を組み立てるときに、どのようなねらいをもって生徒に発問しようかと考えていきたいと感じました。 ・自分で授業準備をする際に、主発問を中心に考え、組み立てたいと思いました。 ・道徳は教科だけでなく、全ての教育活動で行うものであり、そのためには児童生徒との関係づくりが大切と考えます。本日の研修で丸山先生の姿から再確認したところです。この意識をもち続けていきます。

発問づくりのポイントについて、講話と演習によって体験的かつ具体的に理解を深めたと思われる記述が見られた。また、「ねらいに沿った発問かどうかを考えたい」と、研修を通して身に付けたねらいとの関連についての視点から、発問を吟味していこうとする記述も見られた。これまでの自分の道徳授業の組み立て方とは異なる方法を知った参加者もあり、新たな知見を得ることにつながったと考える。さらに、実際の授業中の講師と生徒とのかかわりから、道徳科の意義や特色を再認識し、道徳を道徳教育と結び付けながら、実践していこうとする意欲を記述した参加者もあり、参加者の意欲を高めることにつながる研修となったと考える。

3. 4. 1 4年間の事後アンケート（選択式）の数値の分析

研修会の事後アンケートは、表11のように実施した。また、選択式の事後アンケートの結果は、表12、表13に示す。

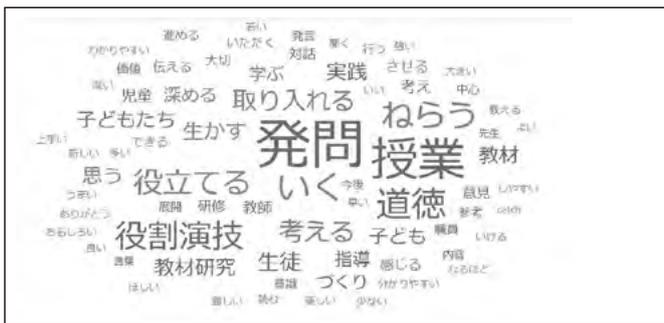
表12を見ると、Q1については、1. とても分かりやすい、2. 分かりやすいといった、好意的な回答が98%以上となった。また、表13からは、Q2について1. 大変役立つ内容だった、2. 役立つ部分もありそうといった、好意的な回答が、98%を超えた。これらは、学校現場の教員の要望や学校の実態を踏まえた研修を提供してきたことや、学習指導要領解説に立ち返って道徳科の授業づくりのポイントを具体的に示したこと、示範授業や模擬授業に、その構造や意図等を開設する講話、そこで理解されたことを具体的に確かめる演習で構成する体験的な研修内容を展開したことが、今回の結果につながったと考える。

【表11 事後アンケートの実施方法】

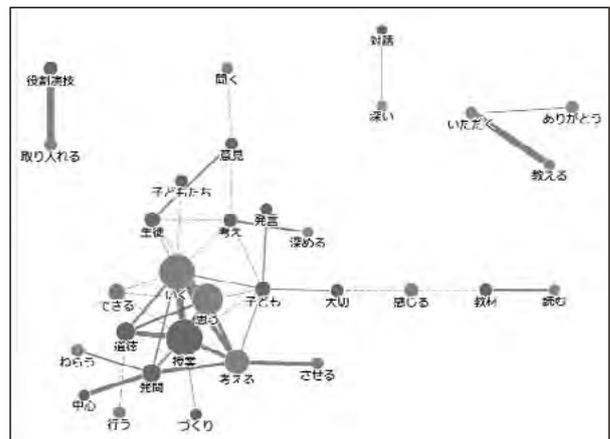
	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
実施期間	2020年6月1日～ 2021年2月18日	2021年5月7日～ 2022年2月22日	2022年4月27日～ 2023年2月23日	2023年5月1日～ 2024年2月9日
研修参加者数	1382	1145	1237	727
アンケート総数	936	574	743	360
回答率	67.7%	50.1%	60%	49.5%

(1)については、子どもの意見をつなぎながら、授業を進めていく教師の構えについて、理解が深まったという記述が多く見られた。また、発問の仕方やまとめ方など具体的な手立てについての記述も見られた。(2)については、模擬授業を体験したり、示範授業を参観したことから、道徳科の授業のイメージをつくったり結びつけたりする記述が見られた。また、自身が子ども役になって授業を体験することで、子どもがどのように思考を進めていくかを理解し、子どもの目線で授業について考えることにつながった記述も見られた。これらのことから、道徳科及び道徳教育における具体的な指導法や生徒との関わり方、授業の進め方についての多くの学びが共有され、今後の教育実践に活かされることが期待される。

次に、「Q4. 本日の研修内容を、今後の道徳教育または道徳科授業の充実にどのように役立てたいですか。」の結果をユーザーローカル テキストマイニングツールにより分析を行った。ワードクラウド、共起ネットワークを、図4、図5に示す。



【図4 2020年度から2023年度Q4のスコア順のワードクラウド】



【図5 2020年度から2023年度Q4の共起ネットワーク】

共起ネットワークと共起回数から、検討し、(3)～(5)の3つのまとまりがあると捉えた。まとまり、記述の抜粋、内容の検討の順に示す。

(3) 発問の工夫

記述式アンケートの抜粋

- ・1時間1時間の授業・指導を考える際、ねらいをしっかりと押さえ、発問を工夫したり授業を行っていったりしたいと思います。
- ・子供たちの発言の中から、批判的吟味により発問を工夫していきたいと思います。
- ・ねらいと発問の吟味をし、子どもたちが話したい、語りたいと思える授業づくりを行っていきます。また、子どもの発言一つ一つをしっかりと受けとめ、そこから授業をつくっていきなと思いました。本日は、大変ありがとうございました。
- ・発問の工夫です。「これだ!」と思える発問を考えるのは難しいですが、そこに教師自身の楽しさを見出せると言いますか、そこが楽しいなどと改めて感じました。

(4) 子どもの意見を生かした授業

記述式アンケートの抜粋

- ・子どもの感想を生かして授業をする。子どもの意見を全て認め、全体でも考えていく。役割演技をやってみる。教科書に線をひいてみる。子どもたちの気づきや思いを大切にしていきたいです。
- ・生徒を信じ、生徒の良さを引き出すような指導、又、生徒の主体的な道徳授業を進めていきたい。
- ・道徳の授業をどうするか、指導書を見る前に考えてみるということがやはり大切なように思いました。そして、生徒一人一人の考えや気持ちを引き出していくことが大切だと思いました。
- ・生徒を信じて、話してもらうことの重要性を感じました。教師から問題を提示せず、生徒の中から拾いあげることができるよう、受容的な姿勢で生徒とやりとりをしたいです。生徒に深く考える、という経験をしてほしいです。
- ・昨年度から研修していて、発問の大切さ、役割演技、対話など考えてきましたが、どこか型にはまったもの、こうでなければ・・・というかたい頭になっているところがあったのですが、先生の授業をしてみて子どもから学べばいい、という言葉で心が少し軽くなりました。色々試して失敗しながら学んでいきたいと思っています。

(5) 役割演技の活用

- ・役割演技をした後の振り返りがとても有効であると分かったので、今後取り入れていきたい。
- ・高学年を担当することが多いですが、役割演技についてはほとんど取り入れずに授業をしていました。百聞は一見(一考)にしかずという言葉を受けて、演技をする場面を考えながら実践してみたいと思いました。
- ・どの教材で、どの場面で役割演技をするか、教材をしっかり読み込んでいきたい。そして「やってみる」というお言葉をもらって、少し勇気を持つことが出来た。失敗することが怖かったり、誰を選ぶかに迷ったりしたが、やってみようと思う。とにかくやってみようと思った。
- ・役割演技を失敗を恐れず挑戦してみたい。生徒達の本音を引き出せるように、発問を工夫して、本気の役割演技を行いたい。(生徒ができるように工夫する)

- ・役割演技は、あんなに人柄って反映させられるものなんだと、びっくりしました。たくさんの子どもたちから選ぶのは難しそうですが、今日のご講義から学んだことを活かしていきたいと思います。
- ・子どもの役をしてみて、登場人物のマミもえりもよくなかった問題点に先に視点がいくのだと今日改めて感じました。先生からの言葉で前向きな視点にも目が向きました。子どもの気持ちに共感することができました。どこで役割演技をしようか迷うところもあるのですが、今日のようによくなる場面を演じさせて、学級みんなでそれぞれの気持ちを共感し合うと、とてもすっきり安心できるんだなと思いました。とても話したり考えたりして楽しかったです。

(3) 発問の工夫では、具体的な発問の作り方や、授業の進行における発問の重要性を捉え、「主発問を中心に考え、組み立てたい」という記述が多く見られた。また、発問に悩みながらもつくりだすことが教師の楽しみになっている経験を想起する記述も見られた。(4) 子どもの意見を生かした授業では、教師が、授業をより対話的で生徒主体にするための工夫を学び、生徒の意見を引き出すことの重要性を再認識した記述が見られた。「生徒を信じ、生徒の良さを引き出すような指導」を目指したいという意欲が表れていると考える。また、「どこか型にはまったもの、こうでなければ…というかたい頭になっているところがあったのですが、先生の授業をしてみて子どもから学ばばいいという言葉で心が少し軽くなりました」という記述からは、研修を通して、子どもと共に考え、共に学ぶ道徳授業への転換へと意識が変容したことを示しており、授業の質的な改善の意識が表れた記述であると捉える。(5) 役割演技の活用では、役割演技を取り入れることで、生徒がより深く考え、感情移入できる授業を実践したいという意見が多くあった。具体的な実践方法についての学びがあったからこそ、やってみたいという教師の意欲につながっていると捉える。

4 成果

以上の結果と考察などを整理し、以下の3点を成果としてあげる。

- ① 学校現場の実態に応じた多様な研修内容を開発・提供できたこと。
- ② 道徳科の特質を踏まえ、示範授業、模擬授業などの具体的な授業を通して得たイメージの意義や意味を、その後の講話で意味づけ、理解し、さらに、演習を通してその理解を実践的に確かめる体験的な学びの組み合わせにより、教職員の道徳科の質的改善の意識を高めることにつながったこと。
- ③ 道徳科の特質を捉え、伝達に重きを置く研修から、子どもと教師と講師が共に「学び合う研修」へと転換がなされていることが明らかになったこと。

上廣アカデミーは、学校現場の実態に応じた多様な研修内容を開発・提供してきた。それらは、実践と理論のどちらかだけに傾くことなく、両者を往還し、融合できるように意識してきた。その過程で、授業中での児童の発言や模擬授業での児童役の教師の言動の意味や意図を丁寧に明らかにしながら、学習者の言動や思考を尊重することの大切さや在り方の具体について、実感的な理解を促すことができた。授業後に、学習者の語りや表情、身振り手振りなどからその子の思いを捉え、その子の学びを見つめる過程を解説したことは、その具体の一つである。それは、道徳科の授業の意味や価値を深めることにつながり、教員の道徳科授業の質的改善の意識を高めることにつながった。また、模擬授業で授業を受ける体験を通して感じたことが、自分の授業者としてのこれまでの姿を振り返り、道徳授業の在り方を見つめる役割を果たした。鹿毛 (2019)⁷⁾は、「教育の責務は、個人としての学習者の存在を最大限に尊重しつつ、彼らの学習と成長を保証することにあるはずだ。つまり、『学習者中心の教育』とは、一人ひとりの『学習者』と彼らがユニークに展開する『学習』の双方に対して常に配慮し、着目し続けるような教育実践のあり方を意味している。」と学習者中心の教育実践について示している。上廣アカデミーの実践は、大学機関の講師も交えた学びが生み出されるところに特徴がある。つまり、子ども、教員、そして上廣アカデミー講師が共に学び合う研修である。授業者としての教師が、授業分析や模擬授業で学習者の体験を通して学習者の学びの実際や教師の応答の意味や意義を理解するとともに、その理解を上廣アカデミーの講師による解説を基に深めながら、演習を通して自分のものとする。それは、大学機関と学校現場が一体となり目の前の子どもの姿から、よりよい道徳科の授業づくりについて議論し、自らの学びをつくり続ける研修である。その意味でも、上廣アカデミー講師が実践的に、教員と協働的に、授業づくりを探究し続けていること、依頼を受けた各地でその機会を提供することができる点に派遣事業の意義があり、これが『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について(答申)⁸⁾の②、「理論と実践の往還」の手法による授業観・学習観の転換の具体の一つであると考える。

5 終わりに

道徳科は、「正しい答えが一つでない」在り方や生き方を見つめていく点や、目に見えない内面的資質である道徳性を養う点に教科の特色がある。「正しい答えが一つでない」からこそ、一人一人の考えを大切にする子どもと教師の構えが重要である。道徳科の授業づくりの質的な改善を行うことは、子どもの実態をとらえた授業づくりの推進、学習者中心の授業づくりを推進していくことにつながる。今後も、大学機関と学校現場がよりよい道徳科の授業の在り方について共に学び、実践に活かしていくことが求められると考える。

付記：本研究は、公益財団法人上廣倫理財団の寄附による上越教育大学寄附研究部門「上越教育大学上廣道徳教育アカデミー」によるものである。

引用及び参考文献

- (1) 株式会社パデコ (2022) 『令和3年度 道徳教育実施状況調査 報告書』 p.45
- (2) 前掲(1)p.45
- (3) 早川裕隆, 小宮健, 田村博久, 佐藤賢治, 岩城淑樹, 林泰成 (2020) 「上越教育大学上廣道徳教育アカデミーの意義について—講師依頼派遣の研修テーマの変遷と、提供した内容を中心に—」『上越教育大学教職大学院研究紀要 第8巻』 p.101
- (4) 前掲(3)p.108
- (5) 前掲(3)p.105
- (6) 中央教育審議会(2022) 『「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について (答申)【本文】』 p.23
- (7) 鹿毛雅治 (2019) 『授業という営み—子どもと共に「主体的に学ぶ場」を創る—』 pp.46-47
- (8) 前掲(6)p.23

A study on the Teachers' Moral Education Training and the Universities Involved: -Focusing on the Results of the "Dispatch Project" at the Uehiro Academy for Moral Education of the Joetsu University of Education

Daiki MARUYAMA* · Hirotaka HAYAKAWA** · Masaaki SAKURAI* ·
Tomokazu SUGAHARA* · Kiyomitsu KUNIMOTO* · Tsuyoshi KOMIYA*** ·
Yoshiki IWAKI**** · Yasunari HAYASHI*****

ABSTRACT

The purpose of this article is to discuss the "Free Instructor Dispatch Project for Training Sessions" (hereinafter referred to as the "Dispatch Project") at the Uehiro Academy for Moral Education, which was established as an endowed research department at the Joetsu University of Education. By examining the annual trends in the dispatch destinations, changes in the training content, and their effects, we will establish the ideal form of the in-school training for moral studies and moral education, as well as the form of the university as an institution that is involved in the training along with the faculty members. For that reason, we specifically analyzed the changes in the number of the dispatches and the training content, the results of the participants' post-training questionnaires, and the descriptive questionnaire using the users' local AI text mining (<https://textmining.userlocal.jp/>). We verified its effectiveness.

The conclusions can be summarized into the following three points.

- 1 We were able to develop and provide a variety of the training content tailored to the actual situation at the schools.
- 2 Based on the characteristics of the moral education, the significance and meaning of the images obtained through the experimental teaching methods such as demonstration classes and mock classes, which had proven meaningful, and the teachers understood in the lectures that followed better. In addition, the experiential learning was conducted through the exercises to practically confirm that understanding. The combination of the two led to an increase in the teachers' awareness about the qualitative improvement of the moral education.
- 3 It has become clear that there is a shift from the training that emphasizes the understanding and communicating the characteristics of moral studies to training in which children, teachers, and instructors "learn from each other."

* The Uehiro Academy for Moral Education ** School Education, Director of the Uehiro Academy for Moral Education

*** Former the Uehiro Academy for Moral Education **** President, General Supervisor of the Uehiro Academy for Moral Education